

# 家庭訪問型子育て支援「ホームスタート」の意義と課題

—— 武豊町への活動導入時に焦点をあてて ——

中 村 強 士

## 要 旨

新型コロナ禍で社会の閉塞感が高まるなか、子育て家庭の誰もが気軽に利用できる訪問型の子育て支援が求められている。日本でも全国に数を増やす「ホームスタート」は、「孤立した高ストレス子育て家庭」を対象に、ボランティアが家庭訪問をして子育て支援を行う唯一の活動である。その効果は定期的に検証されてきている。

本活動を今後増やすためには、その効果を明らかにするだけでなく、特に活動開始時の意義と課題も明らかにする必要がある。そこで、筆者はホームスタートを2020年に開始した「ホームスタート・スマイリーたけとよ」を対象に、訪問するホームビジターへのインタビュー調査を中心に、他の関係者や関係団体への調査も関わらせながら、活動導入時におけるホームスタートの意義と課題を考察することにした。

調査の結果、①ホームビジターの意欲が高いこと、②ホームビジターになるための研修（特に「傾聴」）が重要になること、③活動をとおしてオーガナイザーと強い信頼をつくること、④「孤立した高ストレス子育て家庭」のニーズが解消されたこと、⑤「健康な多子家庭」も対象範囲にすべき子育て家庭になりうること、⑥愛知県の後押しを受けたこと、⑦行政との協働というハードルをすでに越えたこと、⑧広報が大きな課題として残ったこと、の諸点が明らかとなった。いずれにしても武豊町における子育て支援の課題をホームスタートによって達成することは明らかである。

キーワード：ホームスタート、家庭訪問型子育て支援、ホームビジター、  
オーガナイザー

## 1. 「ホームスタート」とは

家庭訪問型子育て支援「ホームスタート」（以下、HS）とは、6歳未満の子どもが一人でもいる家庭に、研修を受けた地域の子育て経験者（ホームビジター、以下ビジター）が、週に1回2

時間程度訪問し、「傾聴」（親の気持ちを受け止めて話を聴くこと）と「協働」（親と一緒に家事や育児、外出などをすること）をする家庭訪問型子育て支援ボランティア活動の仕組みである。イギリスで40年以上前に始められ、世界22か国、日本でも29都道府県の110の地域で始まっている。「ホームスタート・ジャパン」<sup>1)</sup>によれば、ビジターは30代から80代までと幅広く、全国で約3千人が活動している（ホームスタート・ジャパン 2021）。地域の団体には、訪問ボランティアのビジターと、調整スタッフの「オーガナイザー」（以下、OG）がいる。OGは利用者とボランティアの両者をサポートしている。最初にどんなことに困っているのか、どんなふうにビジターと一緒に過ごしたいのか、利用者と共に考え、一人ひとりのニーズに合った支援になるよう調整する。

核家族化や地域のつながりの減少に伴い、本来社会的に育てるべき子育てが「孤育て」になっている。「引っ越してきて、知り合いがいない」、「子どもとどう接したらいいか、わからない」、「実家の親に頼れない」という状況だ。また、産後うつも増えるなか、HSは2016年に妊婦への訪問も開始した。産後は体調不良で気力もなく、申し込みをするのも大変である。出産前から寄り添い、産前産後と切れ目ない支援ができれば、虐待の予防にもつながる。

最近では、高齢出産の40代の利用も増え、仕事や介護と育児の両立に悩む家庭も多くなった。多胎児や多子家庭、ひとり親家庭、外国人や障害児のいる家庭、親に障害のある家庭だけでなく、集団活動が嫌いな親、三世同居で子育て支援拠点に出て行きにくい親、子育て支援拠点等が地理的に遠い家庭などもよくみられるようになってきている。近年、ホームスタート・ジャパンが課題としているのが、①多胎児家庭、②外国にルーツのある家庭、③学齢児家庭、の3点であり、それぞれ「支援拡充プログラム開発事業委員会」を設置し、検討結果を報告書にまとめている（ホームスタート・ジャパン 2021）。また、新型コロナの影響で、保育所を利用する家庭でさえ孤立感やストレスが今まで以上に家庭内に溜まりやすくなっている（中村 2021）。コロナ禍で実家を頼れない妊婦のSOSも増えており、また収入が激減した子育て家庭も少なくない。社会の閉塞感が高まる中で誰もが気軽に利用できる、訪問支援が強く求められている。

日本では、入所型や拠点型の子育て支援サービスの整備は着実に進んでいる。しかしこうした支援拠点等に出てくることのできないグレーゾーンの家庭（虐待は発生していないがストレスが高い家庭）の保護者で、なおかつ孤立した保護者への支援制度はまったくない。

例えば、訪問型の支援としては養育支援訪問事業や乳児家庭全戸訪問事業などもあるが、前者は利用対象家庭が虐待家庭など「子育て困難家庭」等に限られていてグレーゾーン家庭は利用できない。後者はグレーゾーンの家庭を発見する可能性は高いが、発見後つなげる制度が存在しない。つまり、「孤立した高ストレス子育て家庭」を対象に「家庭訪問によって子育て支援」を行う活動は唯一HSだけである。こうした制度間の隙間を埋める活動として日本でもHSは極めて有効とされている（ホームスタート・ジャパン 2011）。

## 2. 「ホームスタート」の意義や効果に関する先行研究

HS の意義ないし効果は、HS 発祥地のイギリスはもとより、日本でも実証され続けている。ホームスタート・ジャパンが 2008 年に当時全国に 4 か所あった地域拠点で HS を利用した 14 家庭に調査を行ったところ、14 家庭のニーズ 70 のうち、1 つのニーズを除いて 99% のニーズに対し何らかの効果があり、また、問題が完全に解消されたとの回答を得たニーズは、ニーズ総数のうち約 6 割と報告されている（ホームスタート・ジャパン 2011）。

続いてホームスタート・ジャパンは、2010 年 12 月までに、全国各地で HS に取り組むすべてのスキームから訪問終了後のニーズ満足度を収集し集計した。その結果、①孤立感の解消、②子育てサービスの利用方法を知る、③親自身の心の安定、④自尊感情や自己肯定感、⑤親の身体 の健康、⑥子どもの身体 の健康、⑦子どもの心の健康、⑧子どもの問題行動の減少、⑨子どもの成長・発達を促す機会をつくる、⑩家族間のイライラの減少、⑪家事の上達、⑫家計のやりくり上手、⑬多子、としご、双子などの悩みの軽減、⑭その他、の全 14 項目のほとんどの項目が「達成及び一部未達成」となっている。最も低いのは「家計のやりくり上手」で 50% 程度となっている（図 1）。

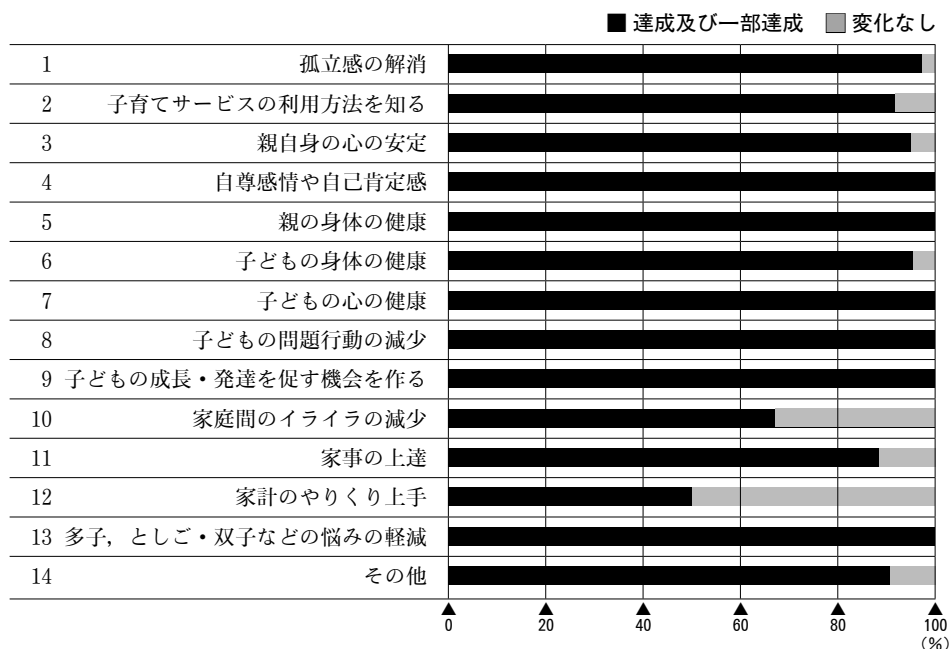


図 1 訪問終了後のニーズ満足度

出所：NPO 法人ホームスタート・ジャパン編（2011）『家庭訪問型子育て支援「ホームスタート」実践ガイド』P.137.

ホームスタート・ジャパンは、① HS の成果は科学的根拠があるのか、② HS のマネジメント

手法に問題はないのか、の2点を明らかにするため、2010年度から継続的な調査研究に取り組んでいる。まずは、2010年度中、全国のHS活動拠点13か所のうち、訪問開始から終結までの支援実績がある7か所を個別に訪問し、59名に聞き取り調査を行った。その結果、①OGのマネジメントがHSによる支援の質を担保するうえで一定程度貢献していること、②利用者の効果は多岐にわたり、これをもたらす要素としてHSに特徴的なものと対人援助全般に共通するものとの両方を見出し、かつ無償ボランティアの利点や強みも要素に関与していること、③従来型サービスでは満たせないニーズを満たしており、さらには地域におけるコミュニティ形成の重要な要素となり得る可能性があること、の3点を明らかにした（ホームスタート・ジャパン2011）。

日本にHSを浸透させた西郷（2011）によれば、HS発祥地であるイギリスで「ホームスタートは活動の有効性について各種の調査による科学的裏づけを明らかにし」（26）公表もされており、多くの家庭においてビジター派遣で満足感や生活改善、情緒面での改善がされているという。こうした結果をもたらした評価ツールとして、イギリスで開発・活用される「モニタリングと事後評価のための実践ガイド」（簡易評価ツール）と、オランダの研究者が実施した調査研究による、より精度の高い「ホームスタート親研修支援プログラムの効果—親やこどもへの行動上の成果」を取り上げて解説している。

尾島・田中（2016）は、イギリスの「簡易評価ツール」をもとに本活動に組み込まれているニーズ13項目を利用者がどのように理解しているかを調査している。その結果、ニーズ13項目を高評価しながらも、以下の方法論的な課題を見出している。①利用者が自分で記入する際に質問が多すぎてサービスをためらう面がある、あるいは記述することが苦手な親にはハードルが高いこと、②利用者と支援者（ビジター）との関係性が反映するため、最後の段階での効果測定は常に表面的なものになる危険性があること、③上記2つの課題を乗り越え、また必要に応じて多機関との連携が求められるOGの役割が重要であること、の3点である。いずれもHSの活動評価・効果測定に関わる重要な指摘である。

野澤（2017）は、HSの満足度を有償支援との比較から実証研究を行っている。その結果、「ホームスタートの支援は、一緒に家事・育児活動を行うことや、金銭的負担や時間をかけずに利用者の満足度が得られることが強み」（85）であり、「それは傾聴や協働によって成り立つことが示唆された」と述べている（同）。

加藤・請川（2019）は、ビジターへの質問紙調査結果を通して、HSが行政介入すべき問題を抱えた家庭と、困難を抱えていない家庭との「隙間を埋める支援」となっており、利用することで母親がプラス感情を高め、支援の場に足を運ぶ、就労するといった結果を得たとしている。これを踏まえて「この活動を地域子育て支援の中に組み込み、官民が連携して推進していくことが必要ではないか」（113）と提案する。

加藤（2021）は、HSが、①母親の孤立感緩和や②子育てにおける家庭内の問題解決の糸口となる、さらに③母親たちが「自分らしい子育て」に向かうためのプロセスを明らかにするため

に、HS利用者8名の事前アセスメントシートの読み取りとインタビュー調査を行い、得られたデータをM-GTAによって分析した。その結果「ホームスタートの支援スタイルである『傾聴』・『協働』は、地域子育て支援で重視されるエンパワーの機能を包含する。HSは、地域の子育て経験者であるビジターと母親との情緒的な関わりを通して『支援する—支援される』といった主従的關係ではなく、『当事者性』や『循環・円環性』といった、地域のつながりを補いながら共に子育てをする『共育』というスタイルで、母親たちの自己決定を促し、『自分らしい子育て』に向かう援助を実現できると考える」(159-160)と結論づけている。

### 3. 研究課題

このような検証によってHSの効果が明らかになるなか、そもそもHSを増やすためにはどうしたらよいのかという疑問が残る。HSはどのような思いで立ち上がるのか。また、活動を実施するための最初のハードルは何か。これらを明らかにするために以下3点のリサーチクエッションを設定する<sup>2)</sup>。

第1に、ホームビジターにとっての意義は何か。なぜ、ビジターになったのか、ビジターになるための研修をどう理解しているのか。ビジターの強みとは何か。

第2に、利用者にもたらした効果は何か。利用者にどのような効果をもたらしたのが明確になっていなければ活動の実施は望めない。

第3に、OGと行政との協働はいかにあったのか。OGはなぜ、HSを実施しようとしたのか、その思いを行政はどのように理解しているのか、HSが地域にもたらすものは何と考えているのか、今後の課題をどのように受け止めているのか。

### 4. 研究方法

#### 1) 背景と目的

愛知県(担当部局は健康福祉部子育て支援課)はHSを活用した仕組みづくりを2020年度から行っており、8月、当取組の先行的事例となるモデル事業(「家庭訪問型子育て家庭寄り添い支援モデル事業」)を県内2か所で実施することにした。そのうちの1か所に決まったのが、愛知県知多郡武豊町を拠点に活動するNPO法人Smiley Dream(実施者名は「ホームスタート・スマイリーたけとよ」)である。

ところで、武豊町が「第2期子ども・子育て支援事業計画」を策定するために実施した就学前保護者アンケートによれば、子育てについて「楽しいと感じることと辛いと感じることが同じくらい」もしくは「辛いと感じることの方が多い」との回答が3割を超えている。町は計画のなかで「その背景として、育児につながる経験のないまま親になる人が多いことに加え、核家族化や近隣住民とのつながりが希薄化し、子育てについてのアドバイスや手助けをしてくれる人が身近

にいない状況があります」と述べた上で、「身近なところで、親子がくつろぎ、保護者が本音で話せ、親子の仲間づくりができたり、気軽に相談できたりする場所が求められています」と今後の課題を述べている。HSが、武豊町の子育て家庭に果たす役割は大きいと推察できる。

本研究は、愛知県のモデル事業を実施する「ホームスタート・スマイリーたけとよ」の取組に参画し、ビジターへのインタビュー調査を中心に、他の関係者や関係団体への調査も関わらせながら、HS導入時に焦点化したHSの意義と課題を考察することが目的である。

## 2) 調査対象

### (1) ホームビジター調査

「ホームスタート・スマイリーたけとよ」のホームビジター（1期生）全15名

### (2) 関係者調査

- ①「ホームスタート スマイリーたけとよ」オーガナイザー 2名
- ②「ホームスタート スマイリーたけとよ」ホームスタート利用者 1名
- ③NPO法人Smiley Dreamのママサークルに参加する母親（未就学児の母親）2名
- ④NPO法人Smiley Dreamのママサークルに参加する母親（就学児の母親）4名
- ⑤「ホームスタートおかざき」オーガナイザー 1名
- ⑥「ホームスタートおかざき」ホームビジター 1名
- ⑦「ホームスタートおかざき」ホームスタート利用者 1名
- ⑧「ホームスタートまんま」（豊橋市）オーガナイザー 2名
- ⑨武豊町健康福祉部子育て支援課（担当課）1名
- ⑩愛知県健康福祉部子育て支援課（担当課）3名

## 3) 調査期間

### (1) ホームビジター調査

訪問前：2021年6月7日（月）～6月30日（水）

訪問後：2021年9月6日（月）

### (2) 関係者・関係団体調査

2021年11月7日（日）～12月7日（火）

## 4) 調査方法

調査実施者は、2021年度日本福祉大学社会福祉学部子ども専修2年、フィールド実践演習で中村強士ゼミに所属する18名。基本的に2人1組とし、「ホームビジター調査」は全員リモート、「関係者・関係団体調査」は対象者の事情に合わせて対面及びリモートによる方法で、それぞれ半構造化インタビューを行った。インタビューにかかる時間は1人につき約1時間～1時間半。その後、インタビューで得られた音声をもとに逐語録を作成した。逐語録はゼミで共有・質

疑応答・意見交換し、これを受けて確認後必要な修正を加えた。

調査（質問）項目は、「ホームビジター調査」は全15名を統一したインタビューガイドをもとに行った（資料2・3参照）。また、逐語録を回収できたのは、全15名のうち14名である。「関係者・関係団体調査」はそれぞれの担当ペアが他者のインタビューガイドを参照しつつ、インタビューガイドを作成した（資料4参照）。

## 5) 当初計画の変更

当初は、スマイリーたけとよ（以下、たけとよ）のビジターに対し訪問前と訪問後にそれぞれインタビュー調査を実施し、それを比較検討することを中心に、かつこれを補う関係者調査を行うことによって、特に実施初年度にあたってのHSの効果を測定する計画だった。しかし、たけとよのHSの利用状況により、計画どおり訪問前後にインタビューできたビジターは1名のみとなった。合わせて、ゼミの課題遂行状況も困難となったため当初計画を一部修正し、関係者調査の対象を増やし（前掲、②③④⑥⑦が当初計画を修正して追加した調査対象）、たけとよを中心にしてさまざまな側面から、導入時におけるHSの意義と課題を検討することにした。ただし、計画修正後にHS利用者が増えたため、利用者1名にインタビューすることができた。

また、当初計画では「家庭訪問型子育て支援『ホームスタート』の効果に関する実証的研究」としていたが、研究を進めるなかで得られた調査結果で「効果」を測定するには不十分と考え、本論文では「意義と課題」を考察することにした。複数の関係者・関係団体から得られた調査結果は、実際の調査回答者は1～4名と数は少ないものの、今後HSを増やすにあたって貴重かつ有益なものと考えられる。

## 6) 分析方法

逐語録のなかで先述の研究課題に沿った応答を抽出し考察する。まず、①ビジターにとっての意義については、たけとよにおけるビジターの逐語録から14名おおよその共通点を抽出し、これをホームスタートおかざき（以下、おかざき）におけるビジターのそれと比較検討する。

②利用者にもたらした効果については、たけとよのビジターと利用者の双方の逐語録から抽出する。そのうえで、おかざきのビジター及び利用者のそれと比較検討する。

③OGと行政との協働については、たけとよのOGと武豊町健康福祉部子育て支援課（以下、武豊町）、ママサークルに参加する母親のそれぞれの逐語録から抽出する。そのうえで、おかざきやホームスタートまんま（以下、まんま）、愛知県健康福祉部子育て支援課（以下、愛知県）のそれと比較検討する。

## 7) 倫理的配慮

インタビュー調査は、共通した「事前説明シート」（資料1）を読み上げて説明し、同意を得てから行った。「事前説明シート」には、調査目的、調査方法、個人情報保護の方法、インフォ

ムドコンセント（調査への参加，同意を撤回したあとの対応，研究成果の発表など）が記されている。また最後に，録音することが可能かどうかも尋ねた。

## 5. 調査結果

### 1) ホームビジターにとっての意義

#### (1) たけとよビジター

たけとよのビジターの逐語録にみるビジターにとっての意義は以下の4点である。

第1に，動機によらず実施意欲が高い点である。まず，動機については「小さな赤ちゃんに携われるならとすぐに応募した」という積極的な動機から，受託法人の事務をしているため「ビジターになるならないという選択肢があまりなく」という消極的な動機までみられた。しかし消極的な動機であっても，「自分の子どもが小さかった時にホームスタートのような仕組みがあったらよかったですとすごい感じた。（中略）元々職員だったこともあって流れに沿ってビジターになってしまった。けれども，自分と同じような思いをしている人の力になれたらという点と，いろいろなことが学べて自分自身のスキルアップにもなるという点でビジターになった」「私もまだ子どもが小さいので支援を必要としていたから流れです。聞く姿勢を大事に接していきたいです」のように，研修などでHSの詳細を知ることによって自分の子育てに置き換えたり，自己実現的な欲求に昇華したりしている。

第2に，「傾聴」という学びに意義を感じ，自身の性格や子育て経験を省察している点である。研修の効果を尋ねた際には，ほとんどのビジターが「傾聴」の重要性を語った。なかには普段の仕事が他人の話聞く仕事の人でも「傾聴」の授業がためになったと語る人もいた。例えば，「傾聴のところだと思うんですけど，距離を縮め過ぎないというところが印象に残っている。どうしても困っているうえでの支援なので，より距離が近くなってしまうと思うけど，そこをきちんと線を自分で引いておかなければいけないというところが自分のなかでは課題ですし，そこをしっかりとしなければいけないと思いました」のように，自分の性格と照らし合わせて研修をふりかえる人もいた。また，「私は仕事とか保育士とかでもなく子育て支援に入ったので，単純に知識がなかった。しかし，研修によって知識が得られたことで自分に自信がついた。私でもできるんだという前向きな方向に向かった」というように，研修が不安を払拭する機会になったという人もいた。さらに，ほとんどの人が，自分の子どもが乳幼児のときにあったら利用したかった制度だと語っている。

第3に，オーガナイザーへの強い信頼である。ビジターは「信頼」「頼りになる」「心強い」「安心して相談できる」「後ろ盾」「責任がある」と表現している。なかには「人としてすごい」と答える人もいた。また，「ホームスタートが始まってみると疑問や解決できないことが出てくると思う。利用者さんの個人情報などを守らなければいけないため，オーガナイザーさんにしか相談ができないから」と具体的に「心強い」理由を語る人もいた。



第4に、「利用者に近い」という強みである。たけとよのビジターには小学生はもちろん就学前の子どものいる方もいる。つまり、利用者にもなりうるビジターである。同時代に子育てをしており、悩む点も似通っているはずである。あるビジターは「ホームスタートに求められている人というところでは、その利用者さんにより近い立場の人がやっぱり必要と思います。より親身になれるというか、より同じ立場、似たような立場で、話を聞いたりとかができる人の方が、利用者さんも気軽にお話ができたり、利用しやすいと思います」と語っている。

## (2) おかざきビジターとの比較検討

たけとよのビジターの逐語録からみるビジターにとっての4つの意義とおかざきのビジターの逐語録とを比較検討する。ただし先述したとおり、おかざきのビジターには1名しかインタビューしていない。

1点目の「動機によらず実施意欲が高い点」については、おかざきのビジターは、同級生に教えてもらい、共感して「今までそんなボランティアとかやってなかった」けれども「なんかお手伝いできないかな」と思ったとのことだった。子どもが好きで、虐待事件を聞くと苦しくなる。支援センターなど外に出られる母親はいいが虐待するような母親はきっと表に出るのが苦手なはずと語っている。また、おかざきのビジターはすでに訪問されている方であるが、子どもがかわいくて「もうね、4回じゃ足りないくらい」と語り、「お母さんが元気になってね。今もほんと気になってるんですけど、大丈夫かな。癩癩起こしたとき大丈夫かなとか思って」とも語っていることから、実施意欲が高いことは明らかである。

2点目の『『傾聴』という学びに意義を感じ、自身の性格や子育て経験を省察している点』については、研修で最も重要だと思ったテーマを尋ねた回答に「傾聴」と答えている。本人いわく自分のことを話しちゃうタイプとのことである。「傾聴ってアドバイスはしないようになって教えられたんですけど、でも、私も孫や娘を育てたなかで、孫との交流もすごく多かった。(中略)子育ての中で、なかなか寝ないとか、おしゃぶりするとか、そういうのすごくわかるので、自分の時はこうだったよとか、孫の時はこうだったよとか」伝えたい思いにかられ、「アドバイスしちゃう」「難しいんですよ」と受け止めている。

3点目の「オーガナイザーへの強い信頼」については、OGを「頼りになる人物」と答えている。研修のところで「オーガナイザーさんが準備万端なんです。ほんとに、すごいなって思っ」てや、フォローアップ研修でビジター同士でも個人情報保護で訪問家庭について話し合えないことから「オーガナイザーさんにしか話せない」「オーガナイザーさんとの関係性はすごい密でした」と答えている。

4点目の『『利用者に近い』という強み』については、おかざきのビジターは、19～20歳のときに出産し、2人の娘がそれぞれ36歳と38歳になる年齢であり、小学生の孫もいる。たけとよのように、利用者にもなれるビジターは当該ビジター以外にも存在しないことがわかっている。たけとよにも孫のいるビジターはいるが、もし平均年齢を算出するならたけとよのほうが圧倒的

に年齢は低く出される。ただ、おかざきのように、いわば「利用者から遠い」ことも強みになる場合があることは後述する。

## 2) 利用者にもたらした効果

### (1) たけとよのビジター及び同利用者

先述したとおり、たけとよのビジターのなかで訪問を終えたのは調査予定時1名であった。当該ビジターは訪問前のインタビューによると、赤ちゃんが大好きで託児所やベビーシッターの業務経験がある方である。研修の効果に関する点については「一緒に出来ることをやっていくという感じで進めていくので、特別ここの家庭に入ったらこうしようというのは特に考えていない。最初に利用者さんに会ったときにその人たちの雰囲気を見て、こんな感じかなというのを思いながら接していく」「話を聴くことはもともと多かったけど、言わなきゃいけないところでちゃんとやってあげた方がいいと思った。自分の口調がつつい出ちゃったりするから、なるべく穏やかにいきたいと思っている」と語っている。また訪問前の気持ちに関する質問にも「お母さんの気持ちが少しでも変わってくれたら嬉しいなというのが私の思い。話したら楽になった、聴いてもらえてよかった。私の子育てしてきた中の話を聴いて、それでいいのだと思ってもらえたりしたらいいなと思っている」と語っている。現在、孫を育てる娘の子育てをみて大変と感じていた。

そして訪問後のインタビュー結果である。担当されたのは、生まれたばかりの女の子と幼稚園の年長の男の子がいる家庭。母親は上の男児への接し方がわからない。ビジターは下の子を抱っこし、母親と男児との関係を密にすることから始めている。2日目以降は、事前に他人に関わらない男児という情報に対し、一緒に遊ぶことによって男児との信頼関係を築いていた。いわば母親のロールモデルを演じていたことになる。また、「お母さんは甘えるのが下手」という見立てをし、自身の経験を踏まえた助言をしている。

3回目の訪問時には、母親から次のことを聞いている。幼稚園の先生とぶつかった男児がビジターと話せるか不安だったが、普通に話すだけでなく機嫌よくなり家で困らせるようなことをしなくなった。また、ビジターと過ごしたあと、自ら進んでお手伝いしたりするようになった。それがうれしいと。もちろん、母親自身も男児への見方を変容させた。母親にとって当たり前だと思っていた行動も、当たり前ではなくすごいことと今までと違う見方・考え方を学んだのである。母親も男児も喜びを得るようになり、ビジターは母親の子育て意欲を高めたといえる。

次に、たけとよの利用者はどのように受け止めているのか。1名のインタビュー結果をみてみる。保育士経験がある3人のお子さん(10歳男, 7歳男, 3歳女)の母親である。HSは登園しぶりがある3歳女児が夏休みを前に保育園を休みたくないと予測し、であれば利用しようという理由である。自宅ではなく、図書館、役場、児童館を利用している。

下2人はビジターに懐いた。終了後も「やたらビジターさんに会いたいという」、「ビジターさんに絵をかいたら?と言ったら下の子は絵をかいて真ん中は遊んでくれてありがたうって書いて

た」。ビジターと一緒に絵本や本を探して読んだり、児童館の取り組みを共に行った。「いつもだと上の子の本を探しているときに私を探して外に出ていっちゃいそうになることもあるから真ん中の子に見ててって言うんだけど、みんな自分の本を見るのに必死だから誰も下の子なんて見てないから、ふらふらどこか行こうとしてたけどそれがなかった。やっぱり大人の手が一つあると助かるよねとは思いました」。なお、本利用者はビジターでもある。

## (2) おかぎきのビジター・利用者との比較検討

おかぎきのビジターは1度(4回)の訪問経験がある。「一番はっとされたのは、私子どもの寝顔見て乗り越えたよっていったこと。子どもの寝顔かわいいよねって言ったら、うん、かわいいって。なんでもね、大変なことが吹っ飛んじゃうくらいかわいいので、ママもそう思って共感してくれたと思う」。また「この大変なときはずっとは続かないよって。子どもさんも成長していくから、かわいい時期は、大変なことあるよと。そのときも共感してくれたかな」と自身の経験をもとに「共感された」と受け止めた場面を語っている。

では、おかぎきの利用者(1名)はどうか。看護師経験がある2人のお子さん(3歳女, 0歳7か月女)の母親である。上の子と接し方がうまくいかない時期が続いたために利用し、初回OGとの面談で「母と同じくらいの年齢の方がしゃべりやすいかなと思ったので、それくらいの人でお願い」された。自宅に来てもらい、子どもたちと遊びながら話を聞いてもらった。その結果、一番印象に残っていることとはの質問に、「他の所に行っても子育てのことを長く話せる相手の方がいないので、家でゆっくりそういった話をできたっていうのが良かったかなって。母と同じくらいの年齢の方だったので、母の子育ての考え方とは別の子育ての考え方っていうんですかね、それを知ることができたので、なんかこうじゃなくてもいいんだというふうに思える部分が出てきたのがありました」と語っている。また、利用して自分が変わったかという質問には、「4回目の時に、私が母のことをどういうふうに手伝ってもらったらいいかと話をしたときに、『とりあえずちょっと一回話してみたら』と話をしてもらったことがあったんですけど、その後母にそういうふうに話したら意外とうまくいったので、来ていただいた方に話して自分がそういうふうに分かることができたら良かったかなという感じはしますね。そういうふうにお話をしてもらったから自分が動けたっていうのがあるので」と語っている。ビジターの訪問により、母親の子育て意欲を高め、悩みを解消するための一歩を踏み出させている。

## 3) OGと行政との協働

### (1) たけとよのOG及び武豊町、ママサークルに参加する母親

そもそもたけとよのOGはなぜHSを実施しようとしたのか。たけとよのOGは、名古屋でNPOをしている友人からHSを聞き、愛知県のモデル事業に「応募してみたら」と言われた。OGは以前に団体代表としてHSに近い自主事業を行っていた。HSは自主事業に比べて、①行政と協働できる、②しっかりしたシステムがある、③団体としてもっと力を入れられる、という

3つが異なる。「団体の代表なので、団体のことを考えるとやっぱり安心してやれる事業というのが大きいなって思って誰でも理解できる、どうしても私たちのやっていることって見えづらいし、PR しづらいので、元々おおものところがあって安心してできるっていうのは大きいなというのが1つと、もう1つは行政との共同事業というのをきちんとやりたくって、なかなか相談事業って個人情報があるので行政との共同っていうのはすごく難しく、踏み込めなかったんだけど、このホームスタートだったら行政と個人情報のやりとりもきちんとした契約の中でできるので、自分たちがもやもやしてたところがクリアになるのかなって。まだこれから先のことなんだけど、その時はそれができるといいなと思いました」とOGは語っている。

行政との協働については、そもそも、愛知県のモデル事業に採択される前提として、採択後2年間は県の委託事業、以降実施するなら行政との協働事業という決まりがあった。よって、たけとよのOGはモデル事業に申し込む前に武豊町の窓口で相談している。すると町が「ぜひやりたい」と。この町の判断には以下のような特別な事情があった。2020年度は武豊町で起こったネグレクト事件から20年後にあたる、20年前に児童課に在籍し事件を担当した職員が現在の子育て支援課長。当時保健センター保健師として事件に関与したIさんが現在の子育て支援課職員。そして、OGで母体法人スマイリードリームの理事長のSさんは事件を契機に法人を設立している、という偶然で重要な産物があった。「中核になる3人がすべて、20年前のネグレクトの事件に関わりがあったっていうのがすごく大きくなって、それで20年経って虐待って減ってないよねって。武豊町でもそれから虐待事件が起きてるので紙一重。いつ起きてもおかしくないよねって現場の声も聴いて、やっぱり何か手を打っていかなくちゃいけないっていうのは3人の中で共通として、じゃあやりましょうというタイミングだった」とOGのSさんは語っている。おかざきの情報を聞いて「行政との共同っていうのが難しく、大変だったって言ってたけど、こっちは最初から課長が本当に全てやるよって言ってくれたので、共同のできる土台、人材が偶然揃っていた。本当に偶然だから他の自治体でそれが通用するかっていうのはあまりごめんなさいの話だけど、でも事が進むときって大体偶然が重なってチャンスになることが多いので、そこを私たちは見逃さないようにしなくちゃいけないという。(中略)もうやれるんだったらこのタイミングしかないかなっていうのもあったかなと思います」と語っている。

対する武豊町はどう語っているのか。「やっぱり役場は行政という形を取るの、柔軟な形で動いていくわけではなくて、皆さんの税金で効果的に、効率的に公平に公正にっていうところの制度があるので、これがいいなって思って飛びついても効果が上がらなかったからちょっと無駄だったなということがなかなか許されない世界にいます。でもホームスタートの民間団体さんの場合は、柔軟に、迅速にその時代の流れを捉えて動くことができたり、あとはたくさんの人に声をかけていろんな市民であったり町民だったりという声を聞くっていうところが割と草の根的にできる場所だと思います」。行政がやれないところを民間はやれる。逆に行政は大きな動きをつくるのが民間にそれはできない。「強みと弱みを補い合ってこれから民間の人たちとやっていかなくちゃ。これから子育て支援は多種多様なので対応ができないかなって思います」

と武豊町は語っている。

さて、こうしたOGと行政とが協働しながらHSを進めようとしているなか、HSを利用したことがない、あるいは子どもがすでに小学生のため利用できない母親たちはHSをどう考えているのか。HSを実施する法人で取り組まれているママサークルのメンバーに尋ねた。HSを利用したいと思うかという問いに未就学児の母親は「機会があれば利用したい」と答え、その理由に「もちろん自分が困った時に利用してみて、その内容を例えば、ホームスタートを知らないママ友とかに教えてあげたいからです。何も知らないのに、ここにこういうものがあるよって言ったところで利用しにくいだろうし、利用してみたら自分も将来はサポート側に回るかもしれないし、ホームスタートを広めてあげたいなっていう気持ちもあるので」と語っている。母親2名ともHSの内容や詳細を知らない。「ファミリーサポート」との違いもわからない程度だ。しかし、「ビジターへの要望」を尋ねると「話し相手になってほしい」「気楽に話を聞いてもらえていろいろ教えてくれる人がいい」「子育てのアドバイスも聞けるといい」と語り、また「HSを利用する際、不安に思うことや心配に思うこと」という問いには「担当してくれる人との関係性だったりとか人間性だったりとか」「上手くしゃべれるか」「どこまで信用していいものなのか」と、自身との関係性ととも子どもとの関係性に不安を抱えている。

一方、すでに下の子が就学児になりHSを利用できない母親はHSをどう考えているか。「子どもが未就学児のときに利用してみたいと思ったか」という問いに、ある母親は「どうだろうな、なんかちょっとハードルは高いかなと思います。スマイリードリームが立ち上げた企画だから、もちろん私は子どもが小さかったら使ったと思うんです。ただもし私がそこを知らなくて、それが広報にポーンと載ってたとしたら、多分ハードルは高かったと思います。1人目で、例えば6ヶ月くらいにそのチラシをもらったとしたら、多分電話はできなかったかなと思います」と語っている。そう語った母親はOGでもある。そして「1人目で欲しくなるか2人目で欲しくなるかはその時の状況によると思う」と語る。それはなぜか。「1人目の時は子どもと自分だけだから、手が全然足りてる状態。だから病院行こうにも『この子の病院に行く』、自分の時も別に1人だけだから一緒にいればいい。だけど1人増えると、こことプラスもう1人いるから『この子を連れて行きたいのにもう1人のほうは本当は病院には連れて行きたくない』みたいな。だから手が足りなくなった時にホームスタートと思うのかなと思う。その時にこの制度があったら使ったよね」と語った。別の母親は「そういう時に保健センターとかに行ったらチラシを渡されてみたいな感じだったら思い出すし、使っている周りの人が誰か1人でも『使ったよ』『良かったよ』って言ってたら自分もやってみたいなと思うかな。それで使ってみて楽だったらね、やっぱり1対1より2対2のほうが安心するし」と語っている。さらに別の母親は「多分私的にはすごくハードルが高いんです、もし知らなかったら、だから知ってもらおうようにもっと何か、例えば3ヶ月健診とか保健センターとかに行く機会にああいうオーガナイザーさんが何人かいて、『この人が預かりますよ』とかちょっと顔見せ？全然知らない人と一緒に歩くとか一緒に話すととてもハードルが高いんです。電話をすることは子どもを抱えてるとそれもおっくうになっ

ちゃうので、もうちょっとやっている人の顔が見えたほうが良いのかなと、何かそれこそ最初は1対1ではなくて全員で座談会をすとか、そういう機会があるとみんなも来やすいかなと」と語っている。さらに、健診で必ず行く保健センターや児童館にOGがいると良いというアイデアも出すなかで、「もしあれだったら使ってみたかったなと思うし、ただ使うまでの最初の1歩、ハードルが本当に高いので、それをどうにか低くできないかなとは思いますが」と語る。保健センターや児童館、あるいは役場や病院など「絶対に行かなきゃいけない場所で(チラシを)配られたらいい」というのは未就学児の母親も語っている。もっとも、すでに保健センターで乳児健診の時にチラシを配っているとOGは語っている。

OGは「ホームスタート・ジャパンっていう組織があるのでその枠の中でずっとやっていくのは正直難しいと思っていて、武豊のやり方のモデルとして受け入れてもらってどこまで変えていけるのかなっていうのは一つ課題」と語る。というのは、武豊町が小さな町でかつ知多半島の中心部にあることから、利用者もビジターも町外から集められる。そういった広域利用を「たけとよモデル」としたいのだが、それはホームスタート・ジャパンの枠組みを超えることになるというジレンマだ。そのためのエビデンスをOGは課題にしている。

## (2) おかざき及びまんま、愛知県との比較検討

おかざきはなぜHSをはじめようとしたのだろうか。「3年前に愛知県の生涯学習課が主催する親の育ちだったかな。子育てでネットワークの研修が岡崎でありまして、そこに豊橋のビジターさんがたまたま参加されていて、その人が自己紹介の時にその家庭訪問支援をしているという話をしていた時に、まあそれはどういうことだということで詳しく話を聞いたところが出会ったきっかけ」と語っている。これを聞いてOGは「もう絶対これは岡崎でやろう」と思ったという。その理由は何か。「今年で21年目になるんですけど、親子サークル活動ずっとやっていて、サークルに来てくれるお母さんはそこで地域の人と出会ったりだとか友達ができたりとかするんですけど、そこに来れないお母さんを何とかすることができないかなっていうのはずっと思っていて、サークルに来れないお母さんこそがもっと困っているお母さんだと思っていたので、子育てで悩んでいたり、なのでその家庭訪問支援があるっていうのを聞いてもうほんとにやるしかないと心に決めました」と語る。

おかざきも同じ条件でモデル事業からスタートしているため、岡崎市との事前相談は行ったはずである。おかざきと市行政との協働で最も大きかったのが「広報誌」による周知であろう。「5月から始めて最初2件、3件だったところが9月に岡崎市の広報(広報誌)に特集でホームスタートが取り上げられて5、6、7、8…4か月で12件あった利用者が岡崎市の広報に載ったことで、それも特集で2ページ組んでもらったので、その時にいきなり利用者が15件くらい申し込みがあって、それをどうビジターさんをお願いすればいいかとか誰が回るとか人員を回すのがとても大変です」と語っている。

豊橋市ですでにHSを10数年実施している「まんま」はどのような行政との協働を進めてき

たのか、HSを知らせるために「本当にあらゆることをしたよね」と語る。スーパー、スポーツジム、市内の全産科・小児科などにチラシやリーフレットを置く。ラジオやテレビ、新聞の取材を受ける。ただし、豊橋市の「広報誌」には1回も掲載されたことがない。「豊橋ってちょっと規模が大きいもんで、1万人ぐらいの市なんだけど、大きいとやっぱり子育て支援やってる団体とか、他に老人関係ね、ボランティア団体とか1個の施設を載せるとみんな載せてくれて、それだけ広報がもうやっぱりすごく高いし、赤字経営だったんで、ちょっと広報は1個の世界でいうと全部載せなきゃいけないからね」「なかなか載せられないってずっと言われ続け毎年根気よく載せてください」と語る。

まんまのOGは、「行政機関等との関わりの中で大切にしていることは」という問いに、「行政機関にはホームスタートをちゃんと理解してもらおうと思っていて、このホームスタートの理解ってなんか難しいんだよね、やっぱりやってみるとわからんところも多いとは思って、いかに間違わずにホームスタートを理解してもらおうかっていうところに、やっぱりすぐ理解される方となかなかホームスタートが理解しにくいっていう方がいる。ホームスタートをいかに理解してもらおうか、行政も担当が変わったりするから理解できてもね」と語る。しかし、「OGとして一番大変だったことは」という問いに「行政の理解。行政の理解が豊橋ってなかなか難しい。土地柄もあるし、大きさが大きいということも、全国的には言われている。NPO活動って7、8万人ぐらいがやりやすいって言われてる。行政の理解とかは大きいほどちょっと難しい。異動もある」と語る。まんまにおける行政との協働の困難さは、たけとよとの違いを際立たせている。

同じ行政でも、モデル事業を企画した愛知県はどのようにHSを考えているのか、HSをどのように知ったのかという問いに次のように答えている。「少子化社会対策白書の平成31年版に紹介されてたんです。愛知県としても何か新しい子育て支援を考えて、ちょうど良いかなって。頭の中まだ地域福祉課の職員なので、子育てで、地域ボランティアで、良いじゃないかって。コロナ前だったので、東京に出張行く度、HSジャパンに足運んで、話聞いて、役員が集まる会議とかも一緒に、HSは愛知県にはまだ一つしかなかったんで、『HSを広げるために愛知県でもやりたい』。そこが意気投合して、じゃあ具体的にどうしたらいいかねっていうのは具体的に話し、愛知県の方でもモデル事業ということで、市町村と地域ボランティア団体が協力して、すすめていけるようなモデル事業をやるってことになって始めました。今『孤』育て、孤独な子育て家庭が核家族化で増えていく中で、アウトリーチ、要は『役所に、窓口には、相談すれば対応しますよ』じゃなくて、出たくても出られないお母さんたくさんいるし、特に多胎とか年子、そうじゃなくても2人目3人目ってなったら嬉しい話なんだけど、やっぱり気軽に外に出ることはできなくて、そういうお母さんを救うためにはやっぱり待ってるだけじゃだめだよって、こっちが動くアウトリーチが必要だよって。保健師さんたちが行く新生児訪問とかもあるんだけど、忙しいから『しょっちゅう話聞いて』にはなかなか対応できない、仕組みがあるからいいだろうじゃなくて、もっと相談しやすい場所、身近で、お金がかからない、いつもある」。こうしたHSの意義を語った上で愛知県は「個人的にいいなと思うのは」として、①研修から活動前・活

動中・活動後まで全部マニュアル化されていること、②そのシステムが独占（外部非公開）されていること、③マニュアルを改善し続けていること、④オーガナイザーという指導者を育てるためのレベルの高い研修があること、の4点を挙げている。

では、なぜ、愛知県は武豊町と岡崎市に決定したのだろうか。「モデル事業、愛知県で公募して、6カ所手が挙がって、本当だったらプレゼンテーションで、でもコロナでできなかったので、書類選考だけで、その時に、結局継続してできるとか、だから、元々母体が大きい岡崎さんと武豊さんで、モデル事業が終わった後の継続性が見込めて、市役所からのタイアップもしてもらえて、ボランティアさん地元の方でってお願いしてるので、だからスマイリーさんは元々繋がってる人をお願いしてて、岡崎さんは幅が広くて、100人くらい説明会に参加されてて、地元の民生委員さんとか、子育てサークルの方とか、長くやってるので、それぞれ違った地域性をもって、ゆっくり浸透していけばいいかなと、団体のバックボーンもPR方法も違って、集まっているボランティアさんの平均年齢も思いも違うのは、土地柄も関係してくるのかなと、武豊は団体が細分化されていて、岡崎はそういうのがなくて、逆に『子育て-』って幅広くやっているのだから年齢層が広いかなって感覚的に、福祉に関心のある人がひとつに集まってる感じ」と語る。つまり、愛知県は事業の継続性を見込むために、①母体（法人）の大きさ、②行政からのタイアップの可能性、③豊富な地元のボランティア、の3点が判断基準にあったと語っている。

## 6. 考察

本研究は、HSを実施し始めたたけとよのビジターへのインタビュー調査を中心に、他の関係者や関係団体への調査も関わらせながら、HS導入時に着目したHSの意義と課題を考察するものであった。そのためのリサーチクエッションとして、①ホームビジターにとっての意義、②利用者にもたらした効果、③OGと行政との協働に関わる問いを立て、逐語録から該当部分を抽出した。

第1のホームビジターにとっての意義については、①積極的・消極的いずれの動機であってもビジターへの意欲が高いこと、②研修の役割が重要であり、特に「傾聴」の重要性を学ぶ必要があること、③OGとの強い信頼が必要なことの3点が指摘できる。また、ビジターの年代については意義とは無関係にあるといえる。

第2の利用者にもたらした効果については、たけとよビジター、おかざきビジター、おかざき利用者のところでは本来対象となる「孤立した高ストレス子育て家庭」であり、そのニーズ達成の効果がみられ、母親の子育て意欲を高めたと考えられる。他方、たけとよ利用者は、「孤立した高ストレス子育て家庭」とは感じられず、むしろ「健康な多子家庭」といえる（いわば「手が足りなくなったときのHS」）。しかし、たけとよOGが「誰でもHSを利用できるようにしたい」と語っており、かつママサークルの母親もたけとよ利用者と同様のニーズであることから、本来対象ではないにせよ、たけとよでは対象範囲に含まれる子育て家庭の可能性がある。ただし、た



けとよ利用者はビジター、ママサークルの当該母親はOGと、どちらもHSを良く知る担い手ゆえ、「手が足りなくなったときのHS」は一般の利用者及び母親のニーズではないのかもしれない。

第3に、OGと行政との協働については、武豊ネグレクト事件に関与した共通体験＝「偶然の産物」が功を奏した。OGはこの偶然の産物による「チャンスを見逃さない」。他方でおかぎきやまんまの現状とを合わせて考えれば、行政との協働のあり方がHSの活動を左右するといってもよい。特に、HSを先駆的に実践してきたまんまが「OGとして一番たいへんだったこと」が「行政の理解」であった点を考えれば、たけとよはHSを展開するための高いハードルをすでに越えていると考えてよい。こうした行政との協働を後押しするのが「モデル事業」を新設した愛知県であった。また、今後、「誰でも利用できるようにしたい」というたけとよの考えを実現するのであれば、「健康な多子家庭」も対象とするようなハードルを低く見せる広報戦略が必要であろう。また、ママサークルの母親から出された「経験談の口コミ」や「顔の見える広報」も大きな課題として挙げられる。さらに、OGのいう「たけとよモデル」の構想は、武豊町のように小さい町ほど必要となるだろう。広域で活動することで、やがて各市町村のところで地域団体が増えることも想定しうる。そのためには、現在は町内で実績を積んだのち範囲拡大にふみきることが求められよう。

このように導入時に着目したHSの意義から、HSが武豊町の課題である「身近なところで、親子がくつろぎ、保護者が本音で話せ、親子の仲間づくりができたり、気軽に相談できたりする場所」になることは疑いの余地がない。

なお、たけとよとおかぎきのそれぞれの母体団体は、立ち上がってからおよそ20年の活動を経て、モデル事業を実施することになった。加えて、まんまも団体立ち上げから約20年後にHSを実施し10年以上の蓄積がある。HSを実施するには、それまでの子育て支援を中心とした20年もの活動の蓄積を必要とするのかもしれない<sup>3)</sup>。愛知県がたけとよ（おかぎきも）をモデル事業実施団体として採択した判断基準を参照すれば、①母体（法人）を安定した組織にすること、②行政とタイアップする事業を実施あるいは拡大すること、③活動のための豊富な地元ボランティアを獲得すること、の3点を地道に実践することが、HSを増やすために全国の子育て支援団体に求められることである。

## 7. 本研究の限界と今後の課題

当初の計画を一部変更した結果であるものの、たけとよのビジター以外はほぼ1名のみにインタビューしている。インタビュー調査の限界はあるものの、より精緻な結果を明らかにするには対象者数を増やす必要がある。加えて、今回の調査でおかぎきのビジター及び利用者については、複数いるなかからのOGの推薦者である。よって、OGのバイアスがかかっている事実は否めない。

本研究で筆者がより注目しているのは「行政との協働」である。具体的には、例えば、まんまの取組について、これまで豊橋市の広報誌には一度も掲載されていないものの、市保健所にはチラシ等がおかれたり、健診時に声をかけられたりするなどの協働はみられている。さらに、市と株式会社サイネックスが発行した『2021年度版豊橋子育て情報ハンドブック 0～3歳』には「子育て支援団体」としてまんまが紹介され、まんまがホームスタートを実施していることがわかるようになっている。また、市保健所子ども保健課が問い合わせ・申込先になっている「多胎の妊婦さん・双子の赤ちゃんの家庭への支援」（事業）は、まんまのHSを活用したものである。つまり、行政との協働といっても、HSに近接する保健所・保健部門や子育て支援部門なのか、それを越えた部門なのかで協働のあり方が大きく異なる。さらに、HSの活動を継続するための運営費補助金のあり方や、HSの運営を安定的に維持するための運営委員会のあり方を今後明らかにしたい。

#### 付記・謝辞

本稿は、日本福祉大学2021年度地域連携型研究助成制度（研究代表者 中村強士）における研究成果をもとに報告するものである。

最後に、今回調査にご協力いただいたHSスマイリーたけとよの櫻井雅美さんをはじめOGのみなさま、ゼミ生のインタビューを快く引き受けてくださった、たけとよのビジターはじめ関係者のみなさま、そして、模索しながらも一緒に研究してくれたゼミ生たち、すべての方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

#### 注

- 1) ホームスタート・ジャパンは、HSの日本での安定的な普及を目的とした中間支援組織。地域拠点とは対等平等でフラットな組織関係にある。イギリスに本部をもつHS・ワールドワイド(HSW、各国のHS・ナショナル組織を支援するための組織)により認証された日本唯一の機関。活動の柱は、HSに関する①調査研究、②情報提供、③地域における活動の立ち上げと運営支援、④ネットワークを活用した交流、⑤被災地・避難者支援の5つ。これらを着実に実施していくために、各種委員会が、理事や外部アドバイザーによって構成されている。そして、全国でHSを実践している地域拠点は団体会員としてネットワーク組織を形成している。日本におけるHSによる支援を確実に効果のあるものにするため、日本版支援システムの開発やOG養成研修、地域拠点の立ち上げ支援やコンサル、普及に向けた政府機関との協議等を行っている。
- 2) ホームスタート・ジャパンは地域拠点がHSに取り組んだ理由を事例で紹介している（ホームスタート・ジャパン 2011）。ここでは、子育て支援拠点の活動をしているNPOが「拠点に來ない孤立した親たち」の存在に気づいてHSを導入した事例や、有償の支援に取り組んできた団体が無償ボランティアの意味・効果を実感し取り組んだ事例、認可保育所や児童家庭支援センターなどを運営している法人が地域に点在する孤立化し困難な子育てをしている親たちへ支援のための手段としてHSを導入した事例、継続性があるフレンドリーな支援が可能なおから母子保健推進員の有志でグループを作りHSに取り組んだ事例など、7事例が紹介されている。
- 3) ホームスタート・ジャパン（ホームスタート・ジャパン 2011）は、「新しくホームスタートに取り組む団体（スキーム）を作りたいのですが」という質問に次のように答えている。「個人的な活動とし

ては取り組みません。子育て支援の活動や事業に3年以上取り組んだ経験がある団体であることが1つの目安になります。安全な訪問活動のためには子育て支援経験で培った知識やスキル、そして地域の社会資源とのつながりが重要だからです」(55-56)。

#### 参考・引用文献

- ホームスタート・ジャパン編 (2011)『家庭訪問型子育て支援「ホームスタート」実践ガイド』明石書店
- 西郷泰之 (2011)「イギリスにおけるホームスタート活動の評価方法に関する研究」『大正大学研究紀要』第96号, 243-239.
- 尾島豊・田中春海 (2016)「ホームスタート(家庭訪問型子育て支援)におけるニーズの特徴」『長野県短期大学紀要』第71号, 77-87.
- 野澤義隆 (2017)「ホームスタートによる支援が利用者満足度に与える影響」『社会福祉学』第57巻4号, 85-96.
- 加藤直子・請川滋大 (2019)「訪問型子育て支援『ホームスタート』の可能性」『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』第25号, 113-122.
- 野田敦史 (2018)「日本の家庭訪問型子育て支援に関する研究の動向と課題」『高崎健康福祉大学総合福祉研究所紀要』第15巻第1号, 1-9.
- 中村強士 (2021)「新型コロナ禍からみえた保育所等における保護者支援」『あいち保育研究所 研究紀要』第12号, 43-77.
- 加藤直子 (2021)「子育て支援『ホームスタート』利用者の変容プロセス—自分らしい子育てに向かうための援助とは—」『子ども社会研究』第27号, 141-162.

#### 参考資料

- ホームスタート・ジャパン (2021)「地域の力で子育ての孤立を解消する家庭訪問型子育て支援・ホームスタート 支援拡充プログラム開発レポート」  
([https://www.homestartjapan.org/\\_wp/wp-content/uploads/2021/06/pgmkaiatureport2020.pdf](https://www.homestartjapan.org/_wp/wp-content/uploads/2021/06/pgmkaiatureport2020.pdf))
- 豊橋市こども未来部子育て支援課・株式会社サイネックス発行 (2021)『2021年度版豊橋市子育て情報ハンドブック』2021年5月発行
- Home-Start japan ホームページ (<https://www.homestartjapan.org/>)

資料1

HS 調査 事前説明シート

日時：\_\_\_\_\_ 対象者：\_\_\_\_\_ 実施者：\_\_\_\_\_

1. 調査目的

このインタビュー調査の目的は、ホームスタートの効果や課題を考察することです。

2. 調査方法

あらかじめ用意した質問項目に沿って質問を行いますが、項目になくてもお話のなかでお聞きしたい事柄が出てきましたら随時質問させていただきます。なお調査時間は1時間程度です。

3. 個人情報保護の方法

このインタビュー調査は、ビジターさんの個人情報を収集することになります。そのため、収集された逐語録は匿名化します。また、逐語録が完成した際には、調査に使用したメモや音声データなどはすべて破棄します。

逐語録はもちろん、調査によって得られたデータを無断でSNS等に公表することはありません。

4. インフォームド・コンセント

- 1) 調査への参加は任意です。
- 2) 調査への参加に同意しないことにより不利益な対応を受けることはありません。
- 3) 調査への参加に同意した後でも、いつでも同意を撤回することができます。
- 4) 本人から請求があれば、当該データを開示します。
- 5) 同意を撤回しても、そのことにより何ら不利益を蒙りません。
- 6) 同意を撤回した場合、提供されたデータ等は廃棄します。
- 7) 収集したデータ等は、本人の同意を得ることなく他者に渡しません。
- 8) 研究成果の発表の方法については、報告書、研究発表、研究論文になります。

以上の事柄について、同意していただけますでしょうか。

同意する ※口頭で同意の旨を確認できたらチェックを入れる

また、インタビュー内容をより正確に把握するため、録音させて頂くことは可能でしょうか。

可能  控えてほしい

●本調査の問い合わせ先：日本福祉大学 中村強士研究室 (nakatuyo@n-fukushi.ac.jp)

資料2

HS ホームビジター・インタビュー調査 インタビューガイド（訪問前）

日時：\_\_\_\_\_ 対象者：\_\_\_\_\_ 実施者：\_\_\_\_\_

1. 【パーソナリティ】ホームビジターとはどんな人物だろうか

- 1) お名前を漢字で教えてください
- 2) 家族構成を教えてください（※子どもは年齢と性別も）
- 3) 出身地はどちらですか
- 4) 趣味や特技は何ですか
- 5) 平日は主に何をされていますか
- 6) 休日は主に何をされていますか
- 7) これまでの人生で一番うれしかったことを教えてください
- 8) これまでの人生で一番たのしかったことを教えてください
- 9) わが子の子育てで印象に残っているエピソードをいくつか教えてください

2. 【ホームビジターになった理由】ホームビジターはなぜビジターになったのだろうか

- 1) 「ホームスタート」をどのように知りましたか
- 2) 「ホームスタート」を知ったとき、あなたはどのような気持ちになりましたか
- 3) 「ホームビジター」をなぜやってみようと思ったのですか
- 4) 「ホームスタート」を知らない人に説明するとしたら、どのように説明しますか

3. 【訪問前の気持ち】ホームビジターは訪問に向けて、どのような気持ちでいるだろうか

- 1) 他の「ホームビジター」になる人をみたとき、どのような気持ちになりましたか
- 2) いま、その気持ちに変化はありますか
- 3) 「オーガナイザー」は自分にとってどのような人物ですか
- 4) ホームビジター研修を受けて、自身の気持ちはどのように変化しましたか
- 5) ホームビジター研修を受けて、自分がホームビジターになるにあたって最も重要なテーマや内容は何か
- 6) それはなぜですか
- 7) 訪問に向けて、いまはどのようなお気持ちですか
- 8) 訪問に向けて、心配なこと、気がかりなことがあれば教えてください

以上

資料3

HS ホームビジター・インタビュー調査 インタビューガイド（訪問後）

日時：\_\_\_\_\_ 対象者：\_\_\_\_\_ 実施者：\_\_\_\_\_

1. 【具体的な支援内容】ホームビジターはどのような支援をしてきたのだろうか

- 1) 「紹介訪問（オーガナイザーとの訪問）」の際、訪問する家庭をどのような家庭と受け止めましたか。また、どのようなニーズをもっていましたか。
- 2) 全4回それぞれの様子をお聞かせください。初回、1回目の訪問では具体的に何をされましたか。また、そのとき印象に残っているエピソードを教えてください。

※傾聴、洗濯、炊事、育児、掃除・片付け、散歩、買い物、通院など

- 3) 2回目の訪問では具体的に何をされましたか。そのとき印象に残っているエピソードを教えてください。
- 4) 3回目の訪問では具体的に何をされましたか。そのとき印象に残っているエピソードを教えてください。
- 5) 4回目、最後の訪問では具体的に何をされましたか。そのとき印象に残っているエピソードを教えてください。
- 6) 利用者さんは、ホームスタート以外の子育て支援サービスを利用された経験がありましたか。また、その内容は何かですか。

2. 【訪問中の変化】訪問によって何がどのように変化したのだろうか

- 1) 「紹介訪問」前の心配なことや気がかりなことはどのように解消されましたか。
- 2) 訪問をする際に、心がけたこと、気をつけたことは何かですか。
- 3) 「紹介訪問」での利用者さんの印象と、4回の訪問を終えた後での印象とではどのようにちがいますか。
- 4) 訪問を繰り返すなかで、利用者さんに対する理解はどのように変化しましたか。
- 5) 訪問を繰り返すなかで、自身に課題を感じたことはありましたか。
- 6) ボランティア（市民・友人・素人）の積極面を感じることはありましたか。

3. 【ビジターの自己評価】利用者にどのような変化をもたらしたと考えているだろうか

- 1) 当初受け止めていた利用者のニーズは解消されたとお考えですか。
- 2) 訪問にあたっては、常に受容的・共感的態度をとられていましたか。
- 3) 利用者さんの孤立感をなくす、あるいは軽減することに貢献できましたか。

- 4) 利用者さんが情緒的に安定することに貢献できましたか。
- 5) 利用者さんが子育てへの自信をなくさないようにすることに貢献できましたか。
- 6) 利用者さんの子育て意欲を高めることに貢献できましたか。
- 7) 他の子育て支援サービスの利用を促進することに貢献できましたか。

4. 【訪問を終えたビジター自身の変化】ビジター自身にはどのような変化をもたらしたか

- 1) 訪問を終えて成功感や達成感が得られましたか。
- 2) 自身のメインの活動（子育て支援など）に変化をもたらしましたか。
- 3) 自身の子ども観や保護者観、子育て観に変化をもたらしましたか。
- 4) 自身の学びがい生きがいにつながりましたか。
- 5) 自身のキャリアアップや資格取得につながりましたか。
- 6) 自身のエンパワーにつながりましたか。

5. 【HSの発展に向けて】ホームスタートの発展をどのように考えているか

- 1) 今後ビジターを継続したいと思いますか。また、それはなぜですか。
- 2) ビジターになるにあたって最も重要なことは何だと思いますか。
- 3) ホームスタートを知らない子育て家庭にホームスタートを勧めるとしたら、どのように伝えますか。
- 4) 改めて、ホームスタートの意義は何だとお考えですか。
- 5) ホームスタートを継続・発展させるために必要なことは何だとお考えですか。

以上

資料4

1. 「ホームスタート スマイリーたけとよ」オーガナイザー インタビューガイド

- 1) 氏名、家族構成、趣味・特技、平日されていること、休日されていること  
これまでの人生で一番うれしかったこと、楽しかったこと
- 2) わが子の子育てで印象に残っているエピソード
- 3) ホームスタートをどのように知ったのか
- 4) ホームスタートを知ったとき、どのような気持ちになったか
- 5) オーガナイザーとして研修を受けたときに学んだことや難しかったこと
- 6) ホームスタートをなぜやってみようと思ったか
- 7) ホームスタートを知らない人に説明するとしたらどのように説明するか
- 8) 活動するうえで大切なこと

- 9) 地域にホームスタートを広めるために何をしているか
- 10) コロナ禍のホームスタートで気を付けていること
- 11) 愛知県や武豊町とのつながりのプロセス
- 12) 行政機関やビジター、利用者との関わりで大切にしていることや気を付けていること
- 13) 利用者やビジターとの相性が合わないときはどうしているか
- 14) 相性についてビジターから相談を受けたか、受けた場合の対応
- 15) ビジターおよび利用者をどのように集めているか
- 16) ホームスタートをやってよかったこと、学んだこと
- 17) オーガナイザーとして一番たいへんだったこと
- 18) これからホームスタートをはじめようとする地域へのアドバイス
- 19) これからの改善点や課題

## 2. 「ホームスタート スマイリーたけとよ」ホームスタート利用者 インタビューガイド

- 1) 氏名, 家族構成, 仕事 (以前, いま)
- 2) 子育てで印象に残っているエピソード
- 3) ホームスタートを何で知ったか
- 4) ホームスタートの存在を知ってどのような気持ちになったのか
- 5) ホームスタートを利用しようと思ったきっかけ
- 6) 周りにホームスタートを利用している方はいるか
- 7) 他の子育て支援制度を何か利用しているか
- 8) どれくらいの期間ホームスタートを利用したか
- 9) ホームスタートをどこで利用したか
- 10) 実際に利用してみて感じたビジターの印象
- 11) ビジター訪問全4回の様子
- 12) ホームスタートの利用前後で変わったこと
- 13) ホームスタートを利用してよかったこと
- 14) ホームスタートに対する改善点
- 15) もう一度ホームスタートを利用できるとしたら利用したいか

### <追加質問>

- 1) 自宅で利用しなかった理由と子どもの様子
- 2) 利用した時間帯
- 3) ホームスタートを使えるようにするにはどう宣伝するか
- 4) 子どもたちのようす
- 5) 訪問前の顔合わせ



### 3. NPO 法人 Smiley Dream のママサークルに参加する母親（未就学児の母親）

#### インタビューガイド

- 1) 氏名，家族構成，出身地，趣味・特技，平日及び休日していること，これまでの人生で一番うれしかったこと，これまでの人生で一番楽しかったこと
- 2) ママサークルの活動内容
- 3) ママサークルはどのような場所か
- 4) ママサークルをつくった理由
- 5) ママサークルはいつから活動を始めたか
- 6) ママサークルをどのように知ったか
- 7) ママサークルを知ったとき，どう思ったか
- 8) ママサークルに入った時期
- 9) ママサークルに参加しようと思った理由
- 10) ママサークルに参加してよかったこと
- 11) 子育てについて悩みがあるとき，ママサークル内で相談するか
- 12) 子育てをしていくなかでママサークルの存在はどのようなものか
- 13) 子育てで印象に残っているエピソード
- 14) 子育てをしていくなかでたいへんなこと
- 15) 子育てで不安に思うこと
- 16) 子育てをするなかで不安に思うことや悩みがある際の解決方法
- 17) 今後子育てを続けていくなかで，どのような支援やサポートがあったらいいか
- 18) ホームスタートをママサークル参加者は知っているか
- 19) ホームスタートを利用しているか
- 20) 今後ホームスタートを利用したいと思うか，その理由
- 21) ホームスタートを利用する際，不安に思うことや心配に思うこと
- 22) ホームスタートを利用するとなったとき，ビジターにしてほしいこと
- 23) ホームスタートのイメージ

### 4. NPO 法人 Smiley Dream のママサークルに参加する母親（就学児の母親）

#### インタビューガイド

- 1) 氏名，家族構成，出身地，趣味・特技，平日及び休日していること，これまでの人生で一番うれしかったこと，これまでの人生で一番楽しかったこと
- 2) 子育てで印象に残っているエピソード
- 3) ママサークルの活動内容
- 4) ママサークルはどのような場所か

- 5) ママサークルをどのように知ったか、その経緯
- 6) ママサークルを知ったとき、どう思ったか
- 7) ママサークルに入った時期
- 8) ママサークルに参加しようと思った理由
- 9) ママサークルに参加してよかったこと
- 10) 子育てをしていくなかでたいへんなこと
- 11) 子育てをするなかで不安に思うことや悩みがある際の解決方法
- 12) 今後子育てを続けていくなかで、どのような支援やサポートがあったらいいか
- 13) ホームスタートをママサークル参加者は知っているか
- 14) ホームスタートを利用したか、当時だったら利用したか
- 15) どのような状況のときにホームスタートを利用したいと思うか、その理由
- 16) ホームスタートの印象

#### 5. 「ホームスタートおかざき」オーガナイザー インタビューガイド

- 1) 氏名、家族構成、出身地、職歴、趣味・特技、平日及び休日していること、これまでの人生で楽しかったこと、うれしかったこと
- 2) 子育てのなかで印象に残るエピソード
- 3) ホームスタートを知ったきっかけ
- 4) ホームスタートを初めて知ったとき、どのような気持ちになったか
- 5) ホームスタートをやりたい理由
- 6) ホームスタートを知らない人にホームスタートを説明するとしたらどのように説明するか
- 7) ホームスタートの活動をする上で大切にしていること
- 8) 活動をする上でたいへんなこと
- 9) ホームスタートの広め方
- 10) コロナ禍での影響
- 11) オーガナイザーとしての大きな目標やテーマ
- 12) 利用者やビジターとの関係がうまくいかない場合の対応
- 13) ホームスタートを今までやってきてよかったと思うこと
- 14) 今後の活動
- 15) 音楽活動をホームスタートに活かすか
- 16) 今後オーガナイザーとしてやってみたいこと
- 17) ホームスタートを広める上でのつながり

6. 「ホームスタートおかざき」ホームビジター インタビューガイド

- 1) 氏名, 家族構成, 出身地, 職歴, 趣味・特技, 平日及び休日していること, これまでの人生で楽しかったこと, うれしかったこと
- 2) ホームビジターになった理由
- 3) 子育てをしているなかでよかったと思うこと, もしあったら楽になったと思うこと
- 4) 訪問されたか
- 5) オーガナイザーはどのような人物か
- 6) 傾聴のコツなど
- 7) ビジター研修を受けて, 自身の気持ちに変化があったか
- 8) 訪問のやりがい, よかった, うれしかった体験
- 9) 訪問前に準備したこと
- 10) 訪問後の反省点
- 11) 訪問してよかった点
- 12) 利用者とのどのような関係を築くようにしているか
- 13) ホームスタートの課題
- 14) ホームスタートを広める方法

7. 「ホームスタートおかざき」ホームスタート利用者 インタビューガイド

- 1) 氏名, 家族構成, 出身地, 職歴, 趣味・特技, 平日及び休日していること, これまでの人生で楽しかったこと, うれしかったこと
- 2) わが子の子育てで印象に残っているエピソード
- 3) 子育てで大切にしていること
- 4) 子育てのなかで特にたいへんだったこと
- 5) 現在ホームスタート以外に利用している子育て支援
- 6) ホームスタートをどのように知ったのか
- 7) ホームスタートを知ったとき, どのような気持ちになったか
- 8) ホームスタートをなぜ利用したいと思ったのか
- 9) ホームスタートの利用前に子育てで困っていたこと
- 10) ホームスタートを利用する前に不安だったこと
- 11) ビジターの最初の印象, 支援の前後で変化したか
- 12) ホームスタートの利用回数, 1日あたりの時間
- 13) 利用全5回の内容
- 14) ホームスタートを利用して一番印象に残っていること

- 15) ホームスタートを通して自分が変わったと思うこと
- 16) ホームスタート利用前の困りごとが利用後改善されたか
- 17) ホームスタートをもう一度利用したいか
- 18) ホームビジターになってみたいか
- 19) ホームスタートの改善点や他にしてほしいこと
- 20) ホームスタートを他の人に知らせたいか
- 21) ホームスタートを広めていくための方法

<追加質問>

- 1) 下の子に困っていることはなかったのか
- 2) 利用前の自身の子育ての考え方と、ビジターの子育ての違いは

8. 「ホームスタートまんま」(豊橋市) オーガナイザー インタビューガイド

- 1) 氏名, 家族構成, 出身地, 職歴, 趣味・特技, 平日及び休日していること, これまでの人生で楽しかったこと, うれしかったこと
- 2) わが子の子育てで印象に残っているエピソード
- 3) ホームスタートをどのように知ったのか
- 4) ホームスタート実施前の活動
- 5) オーガナイザーになったきっかけ
- 6) ホームスタートを知らない人に説明するならどのようにするのか
- 7) オーガナイザーとして研修を受けたときに学んだこと, むずかしいと感じたこと
- 8) ホームビジターになる人を見たとき, どんな気持ちになったのか
- 9) ホームビジター研修ではどのような仕事をしているか
- 10) 現在ビジター及び利用者は何人いるのか
- 11) ビジターや利用者をどのように集めているのか
- 12) 利用する家庭の利用理由
- 13) 大事なマッチングで, もし相性が合わなかったときの対応
- 14) 地域にホームスタートを広めるために何をしてきたのか
- 15) コロナ禍のスタートで気をつけていること
- 16) マスクをしていることによる不便さはあるか
- 17) 行政機関やビジター, 利用者との関わりで大切にしていること, 気をつけていること
- 18) ホームスタートをやってよかったこと, 学んだこと
- 19) オーガナイザーとして一番たいへんだったこと
- 20) これからホームスタートを始めようとしている人たちへのアドバイス
- 21) ホームスタートの改善点や問題

9. 武豊町健康福祉部子育て支援課（担当課） インタビューガイド

- 1) 氏名, 家族構成
- 2) わが子の子育てで印象に残っていること
- 3) 子育て支援課の仕事に就いた理由
- 4) 子育て支援課の仕事に就いたときの思い
- 5) 子育て支援という仕事や存在をイメージしにくい人に説明するとしたら
- 6) 仕事で意識していること, 仕事内容, ホームスタートととの関わりで大切にしていること
- 7) 町の子育て支援で不足していること
- 8) 孤立し言葉にできない人や表面に出ない人が抱えるケースへの支援
- 9) 訪問者に対する言葉かけで意識していること
- 10) コロナ禍で支援するときの現場の変化
- 11) 自粛期間に虐待件数が増えたりするなどの問題はあるのか
- 12) 自粛期間における子どもへの支援
- 13) 子育てに関して町ぐるみでしていることはあるのか
- 14) 大学生活のなかで将来役に立つようなやったほうがよいこと
- 15) 実習に行くにあたって意識しておくこと

10. 愛知県健康福祉部子育て支援課（担当課） インタビューガイド

- 1) 普段の仕事
- 2) 子育て支援課で働くことになった経緯・きっかけ
- 3) ホームスタートをどのように知ったのか
- 4) 武豊町と岡崎市にモデル事業を決定した理由
- 5) ホームスタートをどのような人に利用してほしいのか
- 6) ホームスタートの不足している場所を補うような支援はあるのか
- 7) 困っている人に支援を知ってもらうために行っていること, 学生ができること